



# 狂気という隣人

精神科医の現場報告

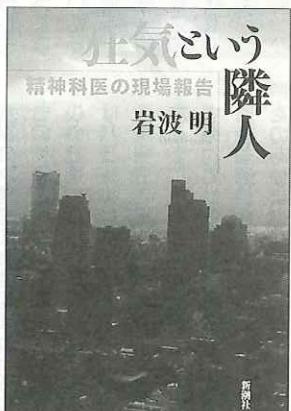
新潮社 1365円

著◎岩波 明

いわなみ あきら

1959年神奈川県生まれ。医学博士。東京大学医学部医学科卒業後、都立松沢病院をはじめ、多くの精神科病棟で診察にあたる。東京大学医学部精神医学教室助教授を経て、現在は、藍野大学医療保健学部教授。本書からは、読書好きな一面もうかがえる

統合失調症は重大な疾患ですが、実はありふれた病気でもあるのです



## 触

法精神障害者と呼ばれる人々がいる。犯罪を犯したにもかかわらず、精神疾患（主に統合失調症）を患っていることに

より、刑罰を免責された精神障害者のことである。彼らの犯した事件が世の中をぎわせる一方で、彼らのその後の処遇や、犯罪とは無縁の、「普通の」精神障害者がどのような治療を受け、いかに社会復帰していくのかといったことは、人権上の問題もあってあまり報道されない。

しかし、統合失調症の発症率は100人に一人。この数字に性差も地域差もない。遺伝子の関与が指摘されているが、遺伝病とも言い切れない。いわば、誰もが発症する可能性のある疾患なのだ。

「自分とは関係のない、特別な疾患だと思いがちですね。でも、発症に到らない『潜在的な』患者さんだっています。統合失調症は重大な疾患ですが、実はありふれた病気であるのです」

「人間の心に興味があるて、精神科医を志した」という著者の岩波さんは、多くの精神科病棟で患者の診察にあたってきた。その経験をもとに、まるで「存在していいもの」のように目を背けられて

きた精神障害者のことを、もっと知つてほしいという思いから生まれたのが、本書である。

「精神病、特に統合失調症にはさまざまな誤解があります。たとえば、つらい状況やショックシギングなどによって罹患する可能性は低い、と僕は考えています。抗精神病薬が有効なことからもわかるように、疾患の原因は脳の生物学的にあるでしょうね。でも

世間では、親子関係などに原因をがいといふこともあまり知られていません。社会復帰して、普通に仕事をしている方も大勢いらっしゃるんですよ」

ほかの病気と同じく、精神疾患も早期発見、早期治療にこしたことはない。しかし、自分が病気であるという認識が本人にないことには、周囲も身近に精神障害者の存在を認めたがらないので、病院にかかるのは遅れがちだ。「僕はイギリスとドイツの治療現場を見てきましたが、両国と比べても日本の治療は悪くない。ただし日本の場合、施設にはらつきがありすぎるんです。閉鎖病棟しかない病院もあれば、明るくオープンな病院もある。それに職員の数が少ないのも、問題のひとつです」

本書は、「精神疾患と犯罪の関係」を大きなモチーフとしており、触法精神障害者が犯した理解不能な犯罪の数々や、彼らを処遇するための法の不備などを述べられているし、「修羅場」としか言いようのない壮絶な医療現場も赤裸々に語られている。

「手がつけられないほどの興奮状態で抱き込まれる患者には5人がかりで抑制を行ない、鎮静薬を打ちますが、患者の体動が激しいため、医師や看護スタッフに注射針が刺さったりすることもあれば、興奮した患者に噛みつかれることもあります。普段は人のいい笑みを浮かべている患者でも、『今、頭で妄想が沸騰しているな』とわかるときがあつて、そんなときは私も怖いですね」

その一方で岩波さんは、20年におよぶ臨床の結果、「統合失調症は人間の本質と結びついた病ではないか」と思うようになったという。「たとえば夏目漱石の『坊っちゃん』にしても、『吾輩は猫である』にしても、漱石が統合失調症だったのではないかと思わせる幻聴の作品に登場するシーモア・グラスという人物も、明らかに統合失調症でしょうね。でも、彼らの作品が多く人の心をとらえていることを思うと、統合失調症は人間の本質とどこかで結びついているのではないかと思わずにはいられません。患者さんを診ていても、なんともいえない親近感を感じるときがありますしね。精神疾患をめぐる状況には、特にそれが犯罪と結びついた場合、刑罰免責の是非や、一般の精神障害者と触法精神障害者を同じ病棟で治療するとの弊害など、多くの課題が山積していることは事実です。しかし、統合失調症だけではなく、うつ病も含めた精神疾患が高い確率で世の中に存在していることを、まずは